

## 「羊のように」

### 詩編 23: 1-3

聖学院大学 心理福祉学部長兼人間福祉学部長 古谷野 亘

長い連休が終わって、これから学期末まで春学期の授業が進んでいきます。

今年は日本中で多くの人が長い休みのときをもてたようですが、私たちの大学では、天皇の代替わりなどとは関係なしに、毎年この時期に、丸 1 週間授業のない連休の期間を設けています。新学期が始まってからおよそ 1 カ月が経ち、疲れがたまっている頃ですから、休みをとって一息入れるというのはよいことだと思います。問題があるとすれば、一息入れたせいで、大学に来るのがイヤになって、そのまま消えてしまう人が毎年少しはいるということです。特に、4 月に張り切って入学してきた 1 年生の中に、大学に戻れなくなる人がやや多いみたいです。ただ、今ここにいるみなさんは、戻って来られたのですから、まあ大丈夫だったということでしょう。

さて、今からもう 10 年以上前のことになりますが、一人の非常に真面目で努力家の女子学生がいました。私が担当したときには人間福祉学科の 4 年生で、社会福祉の資格をとるために老人ホームでの実習に行くことになっていました。私は、当時のルールに従って、実習が始まってしばらくしたところで実習先の施設を訪ねました。施設の人に型どおりの挨拶をして、彼女を呼んでもらいました。ニコニコして出てくることを期待していたのですが、奥から出てきた彼女は、私の顔を見るなり声を上げて泣き出してしまいました。まさに号泣で、心底ビックリしたその時の情景を今でも鮮明に覚えています。

いろいろ聞いていきますと、まじめな彼女は、実にしっかりと準備をして実習に行っていました。そして、あらかじめ考えていた通りに行動しようとしたのですが、どうしても思い通りに動けない。手も足も動かないですし、言葉も出ない。相手の人、つまりホームに入所している高齢者や職員の人たちの反応もまったく予想外で、どうしてよいかわからない。そして、そういう自分が情けなくて、許せないという状態だったのだそうです。「こんなはずじゃあない」と叫びたいような気持ちだったのではないかと思います。

初めてのことで、思い通りに動けないのは別に不思議なことではありませんし、そのために実習があるのですが、いつもまじめに努力し、それまで着実に成果をあげてきた彼女にとっては、とてつもなく辛い経験になってしまったようです。

何回も施設を訪ね、辛かったらやめてもいいんだよと言ったのですが、頑張り屋の彼女はついに 4 週間の施設実習を終えてしまいました。結局、その後、自分は福祉の仕事には向いていないと気づいて、一般の企業に就職していきました。就職が決めたのは他の人よりかなり遅かったのですが、彼女を採用した企業の方は、この時期に、こんな優秀な人を採用できてよかったと喜んでいました。

そういうわけで、彼女の場合はハッピー・エンドになったのですが、ハッピー・エンドとは言えないケースの方がむしろ多いようです。「こんなはずじゃあない」「このままじゃあいけない」と言ってあがいているうちに事態がますます悪くなって、そのままになってしまうみたいなのです。1 年生の中には、入学して

1 カ月経って「こんなはずじゃあなかった」と感じている人がいるかもしれませんが、就職活動の真っ只中にある 4 年生の中にも「こんなはずじゃあなかった」と思っている人がいるかもしれません。

「こんなはずじゃあなかった」と言う人たちが、みんな揃って、わがままな怠け者なわけではありません。老人ホームでの実習で辛い思いをした彼女のように、むしろ人並み以上にまじめに取り組んできた人、努力してきた人ほど「こんなはずじゃあなかった」と言いたくなるのかもしれませんが。真剣に取り組んでいるのに、思うような成果が得られない、あるいは「できていなければいけないのに、できていない」と悩むのです。自分の不甲斐なさや能力の不足に悩み、苦しむ人がいますし、さらには周囲の人の無理解や悪意によって十分な成果を得られないのだと感じる人がいるかもしれません。

物事に真剣に取り組む、努力するのは、もちろん悪いことではありません。しかし、「こんなはずじゃあなかった」と言ってクサったり、「こんなはずじゃあない」「このままじゃあいけない」と悩み続けているとしたら、やはりどこかに間違いがあるのだと思います。

チャプレンや主事の先生方には叱られるかもしれませんが、私がクリスチャンであってよかったと思うことのひとつは、とにかく楽なのです。努力をまったくしないわけではありませんし、現状や自分の境遇に不満がまったくないというわけでもありません。でも、現状をとにかく肯定的に受け入れられちゃうのです。そして、そのうえで、多少の努力をして、努力が実を結んでも結ばなくても、その現実もまた、何となくですけど、肯定的に受け入れられちゃうのです。

先程お読みいただいた聖書の箇所は、古代イスラエルの偉大な国王であり、少年時代には羊飼いであったダビデという人の詩だとされています。羊飼という職業は、日本人には馴染みのないものですが、当時のイスラエルの人にとっては見慣れた職業だったはずで、イスラエルの羊飼いは、おびたしい数の羊の群れをたった一人で連れ歩いていたそうです。それも、馬に乗って追い回すとか、犬に追わせるとかするのではなく、たった一匹の羊に「行こう」と声をかけて、先が曲がった杖を持って先頭に立って歩き始めるだけで、大きな羊の群がついていったと言います。

羊飼いは人々に尊敬される職業ではなかったでしょうし、豊かな暮らしをしていたはずもないのですが、王様や指導者は、しばしば羊飼いにたとえられました。羊を守り、導き、食物を与え、外敵と戦って、時には負傷したり命を落としたりすることもあるという羊飼いの姿が、国民を守る王や指導者のイメージに合うと考えられていたようです。

この詩の中では、王様ではなく神様が、羊飼いにたとえられています。神様が、羊飼いのように自分を導いて、緑の牧場で食物を与え、水辺に連れて行ってくれる。だから、自分には乏しいことがないと歌われています。このすぐ後ろには、おそろしい死の陰の谷を行くときでも、神様が羊飼いのように傍にいて導いてくれるから、災いを恐れる必要もない。そして、生きていくかぎり、神様の恵みと慈しみが与えられると、詩人の確信が歌われています。

また、おそらく別の人の詩だと思われそうですが、詩編の 79 編には「わたしたちは…あなたに養われる羊の群れ」(79:13)とありますし、第 100 編にも「わたしたちは…主に養われる羊の群れ」(100:3)と歌われています。

家畜化された羊は自然界で生きる力をほとんどもっていませんから、もっぱら羊飼いに守られ、導かれ、養われ、生かされている存在です。キリスト教で、そして聖書の中では、自分の力で何かを達成し

ていこうとする人の生き方は、望ましいものとされていません。もちろん、「こんなはずじゃあなかった」とか「このままじゃあいけない」とグダグダ言っている生き方も望ましいものではありません。望ましい、人間の本来あるべき姿として描かれているのは、羊のように無力であるにもかかわらず、しかしそれゆえに自分の力に頼らず、ただ神さまを信頼し、神さまの恵みによって生かされているような生き方です。

成果主義とか自己責任とか言われる現代の社会に生きている私たち人間が、羊のような生き方のできるわけではもちろんありません。しかし、少しは見習ってもよいのではないかと思います。つまり、とりあえず一生懸命に生き、生かされて、うまくいって十分な成果を得ても、それを誇るのではなく、感謝して受けとめる。反対に、不本意な結果になっても、落ち込んだり、できなかった自分をのろったり、周囲を責めたりするのではなく、またうまくできた人をうらやんだり、ねたんだりするのではなく、その現実を受けとめる。そして、そのような自分であるにもかかわらず日々生かされていることを感謝する、そのような生き方をしたいものと思います。

聖学院大学というキリスト教の大学に身を置くことになったみなさんも、これを一つのチャンスとして、羊飼いである神に、羊のように守られ、生かされているという感覚をもっていただけるようになればと念願しています。

祈りましょう

恵みのもとである主なる神様、私たちがあなたに支えられ、あなたの恵みによって生かされていることを悟らせてください。そして、あなたのみを頼りに、日々の歩みを進めることができるようにしてください。救い主イエス・キリストのみ名によってお願いいたします。 アーメン

2019年5月8日 聖学院大学 全学礼拝奨励